文化的実践をとらえる類型枠の再検討と「文化価値創造」と解される取り組みの事例報告

――先行実践と南丹市立美山小学校の実践「美山学」――

小　林　　隆

【抄録】

本小論では，文化を基軸とする実践の類型枠を再検討し，特に地域社会と連携した協働的な推進体制を構築した実践の中から，「文化価値創造」と解される事例を紹介している。

具体的には，文化を基軸とする実践の類型枠を提案した先行研究の課題をふまえ，新たに「文化理解」「文化形成」「文化創造」「文化価値理解」「文化価値形成」「文化価値創造」と分類した。そして，それぞれの説明枠を検討した上で，特に「文化価値創造」と解される南丹市立美山小学校の実践「美山学」を紹介した。第6学年の「美山の未来を考える」では，地域にある伝統文化・生活文化を地域社会の現状と課題との関連から認識した上で，そこ未来志向の新たな価値を見出し，自ら社会に参画すべく表現しているところにその特徴を見出すことができる。このような「文化価値創造」型の実践は，社会が普遍化し地域社会や地域文化が埋没していく傾向にある現代において，さらにその推進が求められる実践である。

キーワード：文化学習，社会科教育，総合的な学習の時間，南丹市美山町

1. はじめに

文化を基軸とする社会系教育の授業実践の類型は中村哲（2017）が試み，「文化価値理解」「文化価値形成」「文化価値創造」として分類している。そして，それぞれの分類の説明枠に基づき，幾つかの具体的実践を紹介している。しかしながら，例えば梅津正美（2018）は，「学習指導要領の改訂期にあって，各学校が『伝統と文化』の教育を本格的に展開していこうとする時，その教育の理念・原理，カリキュラム・マネジメント，授業の構成と実践，地域社会と連携した協働的な推進体制の構築等，主要な検討課題に対して理論的・実践的なモデルを豊かに提供している」とその意義を指摘するものの，「理論的枠組みになる3類型は『類型』と呼ぶには相互の境界は必ずしも明確ではないこと」「類型のもとで発表された単元や教育実践のいくつかには，その定義と必ずしも合致していないものも見受けられた」等と課題を指摘している。したがって，本小論では今一度，文化を基軸とする実践の類型枠を再検討し，特に地域社会と連携した協働的な推進体制を構築した実践の中から，「文化価値創造」と解される事例を紹介したい。

論中では，実践を「文化理解」「文化形成」「文化創造」「文化価値理解」「文化価値形成」「文化価値創造」と分類し，その説明枠を検討した。そして「文化価値創造」と解される実践として，先行実践と南丹市立美山小学校の実践「美山学」を紹介し，その「文化価値創造」の様相を説明している。

2. 文化的実践をとらえる類型枠の先行研究

中村哲は，文化の解釈を「最も広くとらえると，人間が自然とのかかわりや風土の中で生まれ育ち身に付けていく立ち居振る舞いや，衣食住をはじめとした暮らし，生活様式，価値観など，人間と人間の生活にかかわることの総体」と文化審議会答申（平成 24 年 2 月）の記述をもとに説明している。そして，文化は「人間が創り出すものである」「過去・現在・未来と関連する」と述べ，その文化に関する教育実践を先述のように「文化価値理解」「文化価値形成」「文化価値創造」の実践として分類している。

> 「文化価値理解」は，過去から現在まで関連する文化の意味や意義を理解する。「文化価値形成」は，過去から現在まで関連する文化の意味や意義を体験等の活動を通して体得する。「文化価値創造」は，過去から現在まで関連する文化の意味や意義を未来の文化創造に関連づける。

中村はこのように説明するが，「文化そのものを学習対象とするのか」「現代社会の認識に基づく文化の価値を学習対象とするのか」が曖昧なところに類型枠の課題を見出すことができる。したがって，次項ではこの二つの視点に基づき文化的実践の大類型枠を再検討する。

3. 文化的実践をとらえる類型枠の再検討

(1) 学習対象を視点とした文化的実践の大類型

①文化そのものを学習対象とする実践

「文化そのものを学習対象とする実践」は，社会系以外の教科・領域の場合が多い。例えば，『小学校学習指導要領』では国語科の「1 目標」「2 内容」に次のような記述がある。

「1 目標」

各学年共通

(1) 日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。

「2 内容」

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

第１学年及び第２学年

ア　昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして，我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。

第３学年及び第４学年

ア　易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして，言葉の響きやリズムに親しむこと。

第５学年及び第６学年

ア　親しみやすい古文や漢文，近代以降の文語調の文章を音読するなどして，言葉の響きやリズムに親しむこと。

このような実践は，国語科以外にも図画工作科（美術文化・絵画），体育科（武道），音楽科（唱歌・和楽器）等の実践を挙げることができる。これらの実践は，学習対象である文化を子どもの生活世界である社会と切り離した形で学習し，文化それ自体を「理解」「形成」「創造」するところに特徴を見出すことができる。「理解」「形成」「創造」の詳細については，後で述べる。

②現代社会の認識の基づく文化の価値を学習対象とする実践

一方，「現代社会の認識の基づく文化の価値を学習対象とする実践」は，社会系の教科・領域が位置づく。『小学校学習指導要領解説社会編』では，次のように文化財や年中行事を通して地域社会を認識する学習目標を示すとともに，その社会との関連で文化の価値を「理解」「形成」「創造」することを求めている。

ここでは，民俗芸能などの文化財が地域の歴史を伝えるとともに，そこにはそれらの保存に取り組んでいる人々の努力が見られることや，地域の人々が楽しみにしている祭りなどの年中行事には地域の生産活動や街の発展，人々のまとまりなどへの願いが見られることなどを取り上げ，生活の安定と向上に対する地域の人々の願いや保存・継承するための工夫や努力を考えることができるようにすることが大切である。

自分たちも地域の伝統や文化を受け継いでいく一人であるという意識を養い，（中略）地域社会の一員としての自覚につながるものである。

以上を踏まえると，学習対象を視点とした文化的実践の大類型は次の図１のように説明できる。

1.文化そのものが学習対象

・文化理解　　社会系教育以外の教科・領域の場合が多い。

・文化形成　　例）国語科：古典、図工科：美術文化・絵画

・文化創造　　体育科：武道、音楽科：唱歌・和楽器　等

2.現代社会の認識に基づく、文化の価値が学習対象

・文化価値理解　　主として社会系教育が位置づく。

・文化価値形成　　例）社会科：郷土学習、伝統・文化学習

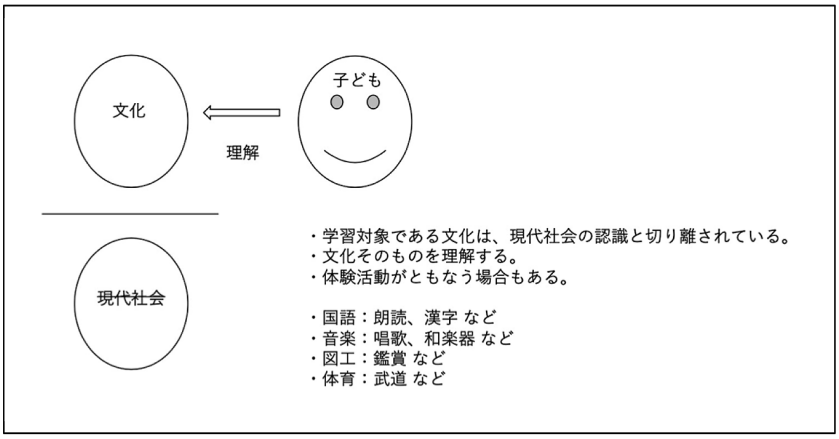
・文化価値創造　　総合的な学習：「○○学」学習

図 1　文化的実践の大類型

(2) 文化そのものを学習対象とする実践

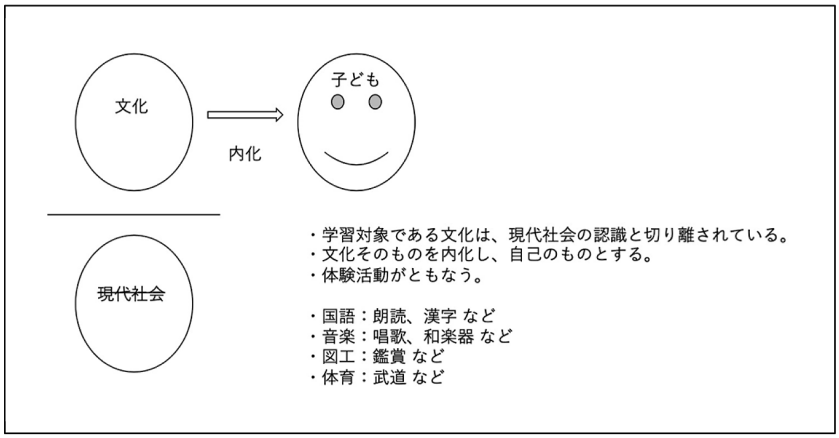
「文化そのものを学習対象とする実践」は，さらに「文化理解」「文化形成」「文化創造」の 3 つの型に分類することができる。

①　文化理解



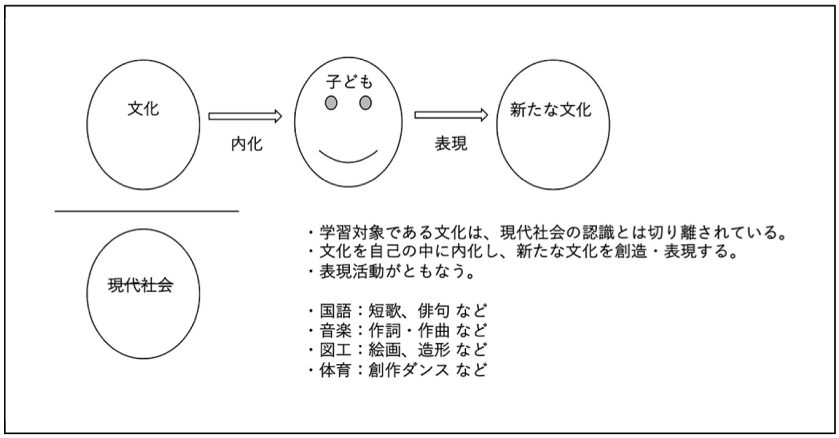
「文化理解」型の実践は，国語科の朗読や音楽科の唱歌，図画工作科の鑑賞のように文化そのものに触れ，学習を通して文化の持つ性格・歴史・意味・意義等を理解している。事実的・記述的知識の習得がなされいる場合が多い。

④　文化形成



「文化形成」型の実践は，理解型と同じように国語科の朗読や音楽科の唱歌，図画工作科の鑑賞等が位置づくが，理解型から発展して文化を解釈・内化し，自身のものとしている。概念的・説明的知識の習得がなされている場合が多い。

⑤　文化創造



「文化創造」型の実践は，形成型において解釈・内化した文化を自身なりの表現において発出している。国語科の短歌・俳句や図画工作科の絵画・造形のように，表現活動を通して新たな文化を創造している。付加的知識・創造的知識の表出である。

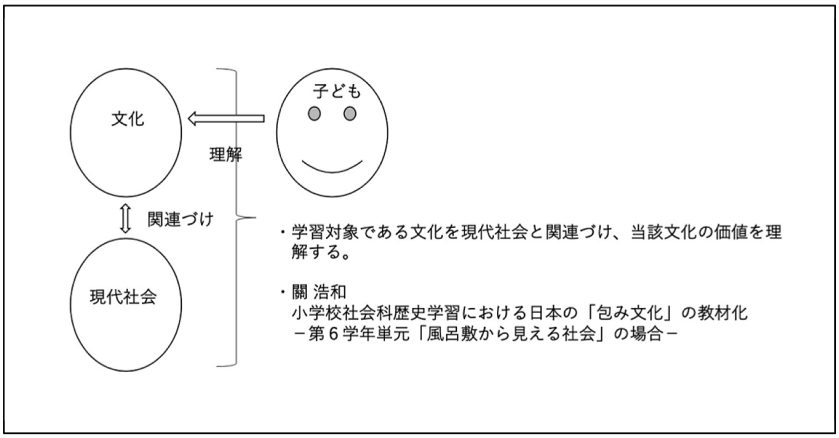
学習は，通常「文化理解」「文化形成」「文化創造」の段階を経て発展していく。例えば小学校第４学年国語科「声に出して楽しもう」（教材名：一茶・蕪村など。菊池光史実践）では，五／七／五，あるいは五／七／五／七／七という言葉のリズムを感じさせるとともに，短い中に描かれた情景を，言葉を頼りに思い浮かべながら俳句・短歌の作品一つ一つを解釈させている。そし

て自身の感じた情景を伝え合うために，手掛かりとしての書く活動を取り入れ，新たな俳句・短歌の作品として表出させている。

(3) 現代社会の認識の基づく文化の価値を学習対象とする実践

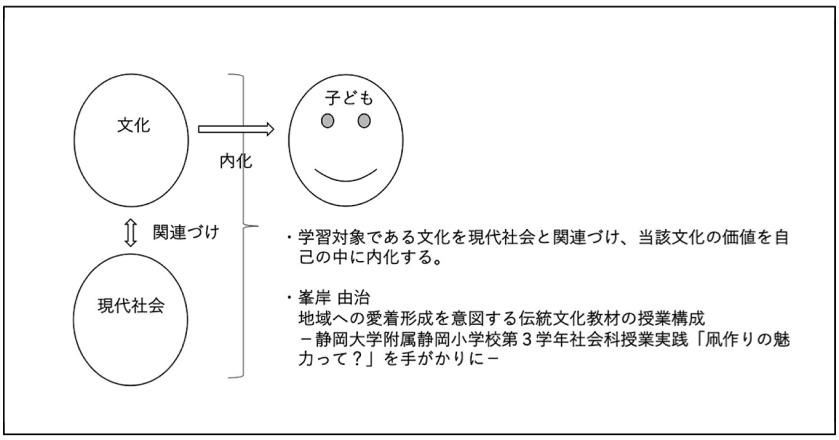
「現代社会の認識の基づく文化の価値を学習対象とする実践」は，さらに「文化価値理解」「文化価値形成」「文化価値創造」の３つの型に分類することができる。

① 文化価値理解



「文化価値理解」型の実践は，学習対象である文化を現代社会と関連づけ，当該文化の価値を理解している。關浩和実践では，子ども達が現代社会における風呂敷の価値を客観的に分析し，概念的知識を構成している。

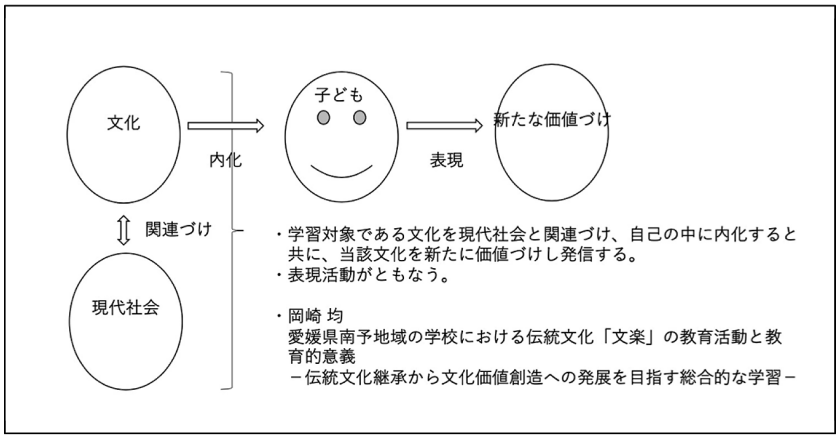
② 文化価値形成



「文化価値形成」型の実践は，学習対象である文化を現代社会と関連づけ，当該文化の価値を自

己の中に解釈・内化し，「自分事」として捉えている。峯岸由治実践では，凧作りの学習を通して子ども達の地域への愛着形成がなされている。

③　文化価値創造



「文化価値創造」型の実践は，現代社会との関連で自己の中に解釈・内化した文化を新たに価値づけし，その価値を表出している。岡崎均実践は，「文楽」をただ継承するのみでなく，地域社会における新たな価値を見出して継承していく厚みのある実践となっている。

学習は，通常「文化価値理解」「文化価値形成」「文化価値創造」の段階を経て発展していく。例えば社会教育実践「こどもたちといっしょに，こどもたちのいために『こいのぼり』を揚げよう」（中村哲『国際交流としての鯉のぼり活動とその意義』）では，鯉のぼりは元来，江戸時代に始まった日本の風習で「端午の節句に男児の健やかな成長を願うもの」という理解を現代社会と関連づけた上で自己の中に解釈・内化し，「国際交流・平和シンボルとしての鯉のぼり」「東日本大震災復興シンボルとしての鯉のぼり」と新たな価値づけをして表出している。

4.「文化価値創造」と解される先行実践の紹介

「文化価値創造」と解される実践として，さらに京都市立嵯峨小学校第３学年社会科「地いきや生活のうつりかわり～『嵯峨大念仏狂言』～」（栗栖ゆみ子実践）を紹介する。

(1) 地域素材としての「嵯峨大念仏狂言」とその特質

嵯峨大念仏狂言は，嵯峨小学校から徒歩５分ほどの場所にある清涼寺境内の狂言堂で毎年４月に行われている。平安後期に円覚上人が始めた「融通念仏」が元となり，長きに渡って伝統を受け継いできた嵯峨大念仏狂言だが，1963（昭和 38）年に後継者不足から一旦途絶える。しかし

ながら，1976（昭和 51）年，地域の人々の熱い思いが狂言を復活させている。嵯峨大念仏狂言の特質は「演者や囃子方，裏方とすべてが地域の人々の手で行われていること」であり，成立から復活までの経緯に見られるように，地域社会の変遷と密接に関わっている事である。

(2) 実践における「文化価値創造」の様相

本実践は，「途絶えていた嵯峨大念仏狂言は，なぜ復活したのだろう？」を主たる学習問題とし，保存会の方々に聞き取り活動をしている。そして，その結果を「嵯峨大念仏狂言の劇について」「嵯峨大念仏狂言に込められた昔の人々の思いや願いについて」「受け継いできた地域に住む昔の人々の思いや願いについて」「受け継いでいく地域に住む今の人々の思いや願いについて」の 4 視点に基づいて整理し，最後に家の人に嵯峨大念仏狂言を紹介する手紙を書かせている。その結果，元来「一人の念仏が他人の念仏と通じ合い（融通），より大きな功徳を生み出す」という念仏の理解と地域社会の変遷の認識に基づき，子ども達が嵯峨大念仏狂言を「地域の生産活動や町の発展，人々のまとまりを願う」「地域の人々の生活の安定と向上を願う」と，地域社会との関連で新たに価値づける実践となっている。

図２　嵯峨大念仏狂言の様子と「文化価値創造」の様相

5. 南丹市立美山小学校の実践「美山学」

「文化価値創造」と解される実践として，最後に南丹市立美山小学校の実践「美山学」の紹介をする。

(1) 美山小学校と「美山学」の概要

2022（令和 4）年度の学校要覧において，美山小学校は次のように紹介されている。

> 南丹市は京都府のほぼ真ん中に位置する 4 町（薗部，八木，日吉，美山）が合併し，平成 18 年 1 月 1 日よりスタートした。（中略）美山町には，貫流する由良川，棚野川流域に 57 の集落が点在し，1,699 世帯，3,508 人（令和 4 年 4 月現在）が農林業等で生計を営んでいる。近年，過疎化，少子・高齢化が著しく課題も多い中で，これに対応すべく地域の活性化と住みよいふるさとづくりを目指した取組が活発に進められている。
>
> 美山小学校は，知井小学校，平屋小学校，宮島小学校，鶴ヶ丘小学校，大野小学校が一つになり，平成 28 年 4 月 1 日に開校した。本年度の児童数は山村留学生 7 名を含め 142 名，教職員は 26 名である。

このように北陸地域から京都，大阪への交通の要衝として栄えた美山町は，古くから独自の文化が発展し，多くの伝統的文化財を有している。しかしながら年々過疎化が進行するなど，地方社会の持つ課題も顕在化している。そのような中，現在でも地域文化を大切にして次代へ継承しようとの意欲が高く，多くの活動が行われている。

美山小学校は，今年で開校 7 年目を迎えた。令和 4 年度の学校教育目標は「ふるさとを愛し　夢や希望に向かって　自らを高める　美山っ子の育成」であり，その教育課程の中心に位置づくのが「美山学」である。再編成された 5 つの小学校地区の持つ特色ある教育資源や文化を活用し，総合的な学習の時間を柱として「美山学」を構築したのである。「美山学」の概要は，学校経営要覧に「美山町の人・文化・自然・歴史等を，教科や総合的な学習の時間と関連づけながら，地域をより身近に興味深く学びます。」と説明されている。

(2) 各学年における「美山学」

① 第 3 学年の「美山学」

第 3 学年の「美山学」は，「発見！美山のお宝」をテーマとしている。そして，テーマ設定の理由を「自然が豊かで，伝統的な建物や文化が残る美山町のよさを感じている子どもたち。地域の人やものに触れながら，自分たちの住む町のお宝を発見し，ふるさとを愛する心情を育てたい。」と記述している。年間計画では，このテーマ設定のもと「美山のお宝①～茅葺きの里～」「美山のお宝②～お祭り～」「美山のお宝～おいしい牛乳」「美山のお宝～学習したことをまとめたよ」を計画し，実践している。

② 第 4 学年の「美山学」

第 4 学年の「美山学」は，「Happy　美山～えがおのふくし～」をテーマとしている。そして，テーマ設定の理由を「幼児教育や障がい者教育，高齢者施設などの美山の福祉に視点を当て，そ

れが決まった地域だけでなく，美山町全体で行われていることに気付くと共に，一人一人が大切にされる美山の福祉を再認識し，郷土を愛する態度を養う。」と記述している。年間計画では，このテーマ設定のもと「美山の自然を見つめよう」「美山の福祉について知ろう」「みんなにやさしいまちづくり」を計画し，実践している。

③　第５学年の「美山学」

第５学年の「美山学」は，「今を知り，未来の美山を考えよう！　ともに輝く未来を創ろう！」をテーマとしている。そして，テーマ設定の理由を「各教科や実生活において，自然豊かで伝統的な文化が多く残る美山のよさを子どもたちも感じている。美山では，そのよさを農業や観光業に生かし生活を営んでいる人も多い。児童が産業という視点から探究活動を行うことを通して，美山のよさを再確認すると共に，美山の農業及び観光業における課題を見出し，課題解決を模索することで深山の未来を考えることができるようにしたい。美山の現状を知り，これからの美山を考えることでふるさと美山に対する愛着をより一層確かなものとしたい。」と記述している。年間計画では，このテーマのもと「美山の農業について知ろう」「美山の新しい農業について知ろう」「美山の観光のこれまでを知り，これからについて考えよう」を計画し，実践している。

④　第６学年の「美山学」

第６学年の「美山学」は，「古の美山から学ぶ」をテーマとしている。そして，テーマ設定の理由を「ふるさと美山にどのように愛着を抱き，再編により広がった校区を我が地域として誇りあるものにしていくかが本校の課題となっている。再編時から「美山学」として美山の文化や産業などに目を向けてきた。さまざまな人・もの・ことに出会ってきたからこそ，社会科で歴史を学びながら，もう一度，生まれ育った地域，美山に目を向けさせたい。国際社会を生きる児童に，様々な人々の考え・文化を理解させ，自分の世界を広げ，様々な人々に発信する力もつけさせたい。さらに，美山の未来に目を向け，よりよい人生を歩み，自分の夢や希望を実現するために，今できること・すべきことを考えさせ，自主的・継続的に取り組んでいこうとする態度を養いたい。そのために，身近で働く人の話を聞くなどして，多くの人との関わりの中で学ばせたい。」と記述している。年間計画では，このテーマのもと「古の美山から学ぶ①」「古の美山から学ぶ②」「美山の未来を考える」を計画し，実践している。

6.「美山学」における「文化価値創造」の様相

「美山学」に通底する学習観は，第３学年から第６学年に共通する「育成したい力」（学習目標）に見出すことができる。「育成したい力」は，次のように述べられている。（下線：筆者）

【知識及び技能】

地域の人，もの，ことに関わる探究的な学習の過程において，課題の解決に必要な知識及び

技能を身につけるとともに，地域の特徴や良さに気付き，それらが人々の努力や工夫によって支えられていることに気づく。

【思考力・判断力・表現力】（中略）

【学びに向かう力・人間性等】

地域の人，もの，ことについての探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに，互いの良さを生かしながら，持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え，自ら社会に参画しようとする態度を育てる。

「美山学」において，子ども達は4年間の学習を通して美山町の特色ある伝統文化・生活文化を地域社会の持つ特徴や課題を踏まえて自己の中に解釈・内化している。そして，持続可能な地域社会を実現するための行動の仕方を考えている。特に第6学年の「美山の未来を考える」では，地域社会の現状と課題を認識した上で，そこに美山町ならではの文化価値を見出して未来志向の新たな価値を創造し，自ら社会に参画すべく表現しているところにその特徴を見出すことができる。

7. おわりに

本小論では，文化を基軸とする実践の類型枠を再検討し，特に地域社会と連携した協働的な推進体制を構築した実践の中から「文化価値創造」と解される事例を紹介した。「美山学」のような「文化価値創造」型の実践は，社会が普遍化し地域社会や地域文化が埋没していく傾向にある現代において，さらにその推進が求められる実践である。

引用・参考文献

・中村　哲編著『文化を基軸とする社会系教育の構築』風間書房　2017
・社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究　第30号』2018
・文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版　2018
・市川伸一編『認知心理学4　思考』東京大学出版会　1996
・関西学院大学『教育学論究（8）』2016
・www.bukkyo-u.ac.jp/museum/：佛教大学宗教文化ミュージアム（2022/11/10）
・南丹市立美山小学校『令和4年度学校経営要覧』2022

（こばやし　たかし　共同研究研究員／佛教大学教育学部教授）